

再び「鉤状石器」について

－縄紋中期の異形石器の事例－

大内 千年

はじめに

令和4年度に実施された千葉県教育振興財団出土遺物公開事業「柏北部東地区の遺跡展 地中からの目覚め」の中では、柏市小山台遺跡で出土した「釣針形」をした石器が、縄紋中期の異形石器の一種として展示され注目された。筆者はかつて、千葉県内の同様の形態を持った石器について、「鉤状石器」と仮称したうえで集成し、出土した遺跡での伴出土器等の様相から、房総半島においては縄紋中期後葉を中心とした時期に特徴的にみられる可能性が高いことを示した¹⁾。小山台遺跡出土の石器は、まさにこの鉤状石器の類例であり、筆者の推論に合致する資料であると思われた。ここでは、小山台の事例を含め、旧稿での集成以降に確認した鉤状石器の事例について追加集成し、再度、その特性について確認しておきたい。

1 千葉県内での追加事例

第1図1は、柏市小山台遺跡(70)SI004で出土したものである²⁾。明らかな欠損はなく「完形」のようである。石匙にみられる「つまみ」状の作り出しはない。報告書では、異形石器として報告され、『「釣針形石器」または「鉤状石器」と呼ばれてきたもの』とされた。時期的な位置づけについては、「中期後半の出土例が多」とされた。出土した(70)SI004住居跡は、「加曾利E3(古)式期」と報告されている。炉体に加曾利E3式土器が使用された住居で、この住居跡の覆土上層から鉤状石器が出土しており、石器の時期は中期後葉と判断してよからう。石材はチャートと報告されている。報告書掲載の実測図から計測した値で、軸部長4.9cm、鉤部長3.1cmである³⁾。

第1図2は、松戸市紙敷遺跡B4区の62グリッドの7層混土貝層中で出土したものである⁴⁾。明らかな欠損はなさそうで「完形」とみられる。「つまみ」状の作り出しはない。報告書では、石匙として報告され、有吉北貝塚、辻遺跡の出土品の類例とされた。本資料が出土したB4区の出土土器は「加曾利EⅡから同Ⅲ式の古相を呈する段階のものが卓越する傾向」と報告

されており、推定される時期は中期後葉としてよからう。石材は珪質頁岩、軸部長(報告書では長さ)7.25cm、鉤部長(報告書では幅)4.85cmと報告されている。

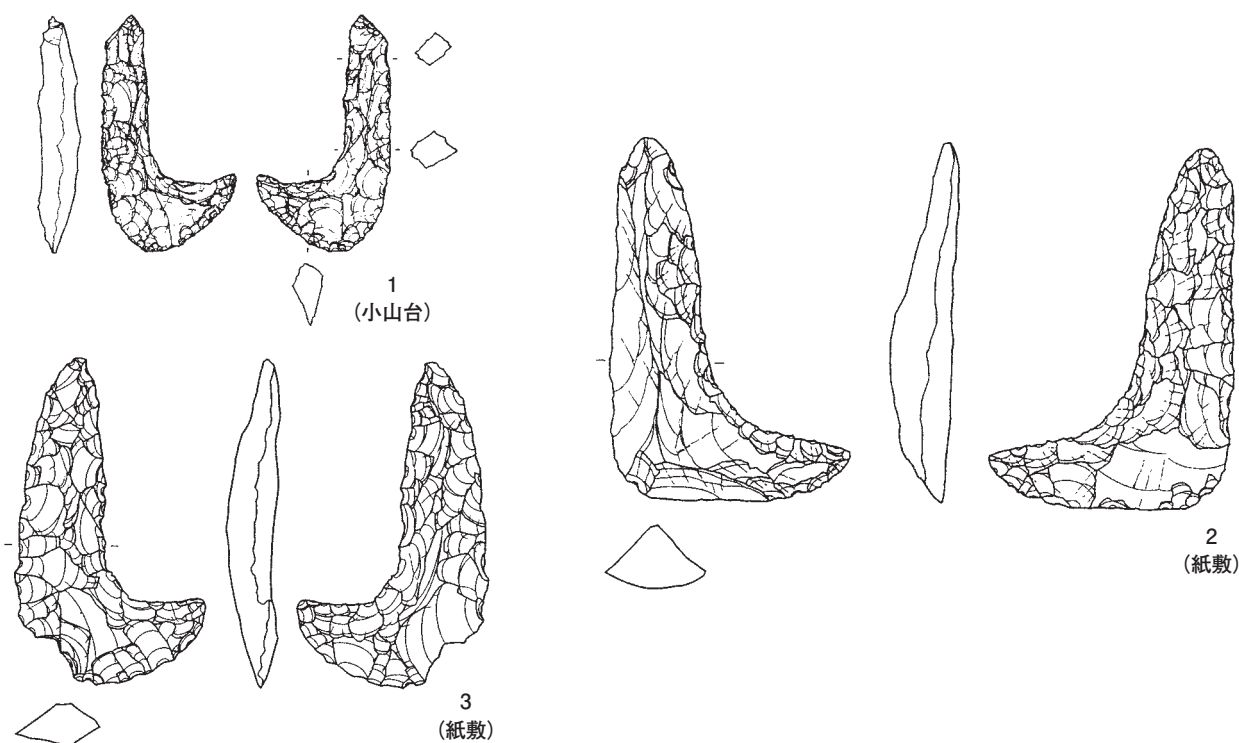
第1図3は、同じく松戸市紙敷遺跡の第1地点表土中で出土したものである⁵⁾。石器の下部にやや大きな剥離痕が認められ、ややいびつな形となっている。「つまみ」状の作り出しは認められない。報告書では、石匙として報告され、第1図2と「同様の石材・形状を呈するもの」とされた。表土中出土のため時期は特定されていないが、報告書抄録によれば、この地点では「中期前半から後半にかけての集落と、斜面貝層が確認された」とされていることから、時期は中期としておきたい。石材は珪質頁岩と報告されている。報告書の実測図から計測した値で、軸部長6.45cm、鉤部長3.65cmである。

上記3例を加える形で、千葉県内での鉤状石器の出土事例を第1表にまとめた。旧稿での集成とあわせ、千葉県内での出土事例は9例となった⁶⁾。

なお、船橋市海老ヶ作貝塚第2次調査概報で類例と思われるものを確認したが⁷⁾、写真のみの報告で詳細が不明なため、参考資料として認識しておくにとどめたい。また、船橋市飛ノ台史跡公園博物館の令和4年度企画展で、船橋市高根木戸遺跡で類例の可能性が高いものが存在することを知った⁸⁾。こちらも報告を確認できていないため、現状では参考資料としておきたい。

2 周辺地域での事例

旧稿では、周辺地域での集成的研究を紹介し、鉤状を呈する石器が関東甲信越の広い範囲で認められ、なかでも甲信地域で多いことから、房総半島で出土した鉤状石器が曾利式土器文化圏と関連する可能性を疑った。千葉県以外の地域での事例探索は進んでいないが、旧稿以降に、隣接県で少数の類例を確認したので、提示しておく。



第1図 千葉県内での「鉤状石器」追加事例 (S=2/3)

第1表 千葉県内出土の「鉤状石器」

番号	市町村	遺跡名	出土地点	時期	石材	「軸部」 長 (cm)	「鉤部」 長 (cm)	報告書
1	柏市	小山台遺跡	(70)SI004	中期後葉	チャート	4.90	3.10	千葉県教育振興財団2019『柏北部地区埋蔵文化財発掘調査報告書15-柏市小山台遺跡B区-縄文時代以降編』
2	松戸市	紙敷遺跡	B4-62 7層	中期後葉	珪質頁岩	7.25	4.85	松戸市教育委員会2003『千葉県松戸市紙敷遺跡』
3	松戸市	紙敷遺跡	第1地点表土	中期	珪質頁岩	6.45	3.65	加藤建設株式会社2010『千葉県松戸市紙敷貝塚第1地点』
(旧稿1)	山武市	辻遺跡	第21号土坑	後期初頭	頁岩	6.53	4.75	山武郡市文化財センター1997『山武町不特定遺跡発掘調査報告書 辻遺跡』
(旧稿2)	佐倉市	神門房下遺跡	第5号住居跡	中期後葉	黒曜石	5.51	(2.40)	印旛郡市文化財センター1996『千葉県佐倉市神門房下遺跡発掘調査報告書 南部中学校埋蔵文化財調査事業』
(旧稿3)	千葉市	有吉北貝塚	SB049	中期後葉	珪質頁岩	(5.00)	(3.73)	千葉県文化財センター1998『千葉県東南部ニュータウン19-千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)-』
(旧稿4)	千葉市	有吉北貝塚	SK264	中期中葉	ホルンフェルス	5.14	4.57	千葉県文化財センター1998『千葉県東南部ニュータウン19-千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)-』
(旧稿5)	木更津市	伊豆山台遺跡	SI026	中期後葉	(非黒曜石)	(2.80)	2.56	木更津市教育委員会2000『木更津市文化財調査集報4 伊豆山台・金鈴塚古墳』
(旧稿6)	市原市	奉免上原台遺跡	A10-II d	?	鉄石英	(3.80)	3.20	市原市文化財センター1992『-千葉県市原市-奉免上原台遺跡』

※番号欄の「(旧稿●)」は大内(2004)での図番号を示す。なお、(旧稿7)は石匙であることから除いた。

※計測値に()を付けたものは、欠損部分の残存した範囲の計測値である。

第2図1は、神奈川県綾瀬市に所在する道場窪遺跡7号住居址出土のものである⁹⁾。石匙として報告され、「基部は折れて欠損」とされた。7号住居址は、埋甕炉の炉体として連弧文土器が用いられ、覆土中から「連弧文」「加曾利E2式」「曾利Ⅱ式」「加曾利E3式」が出土している。時期的には中期後葉としてよかろう。石材は黒曜石で、報告書掲載の実測図から計測した値で、軸部長6.13cm、鉤部長4.88cmである。

第2図2、3はいずれも茨城県つくば市（旧谷和原村）の大谷津A遺跡出土のもので、いずれも石錐として報告されたものである¹⁰⁾。第2図2は、報告書掲載の図を、180度回転して示した。出土地点は「D6i4」であり、遺構に伴わず出土したものであろう。大谷津A遺跡全体としては「検出された遺構や遺物の大半は、縄文時代中期の阿玉台式期や加曾利E式に比定され」¹¹⁾とのことなので、中期中葉～後葉に位置づけられよう。石材は黒曜石で、軸部長（報告書では長さ）4.0cm、鉤部長（報告書では幅）3.0cmと報告されている。

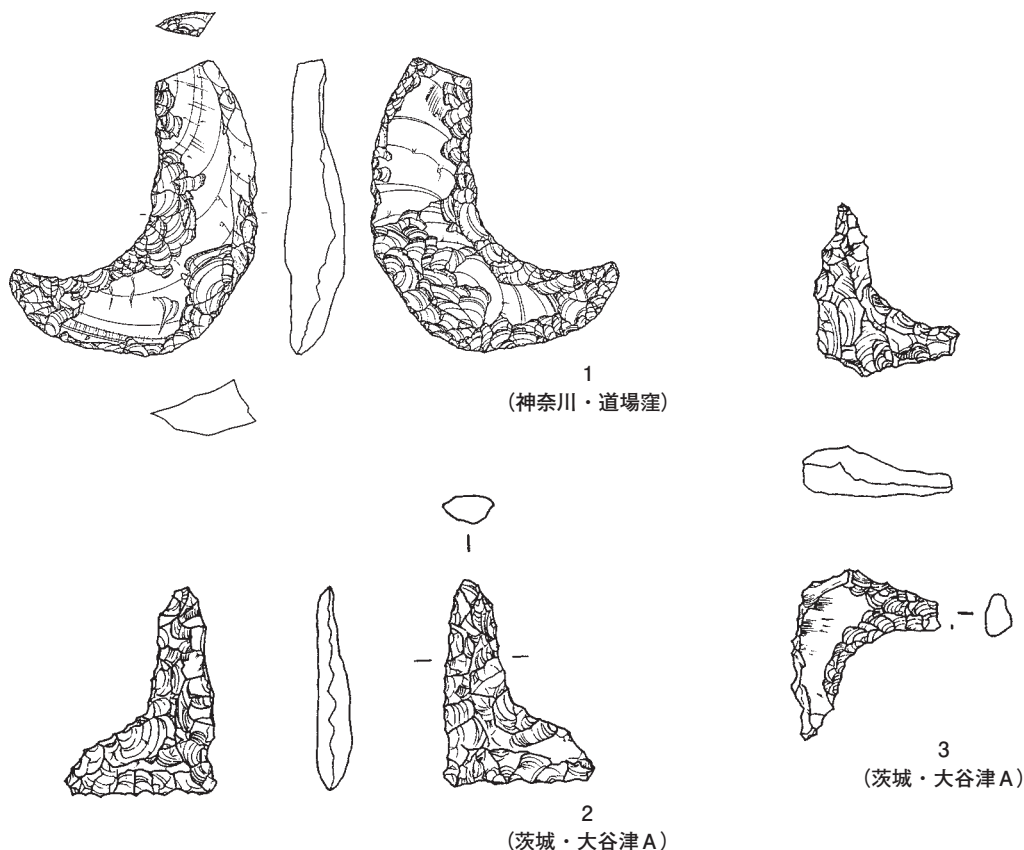
第2図3は、報告書掲載の図を、90度回転して示した。S K 267出土であるが、S K 267は底面の凹凸が激

しい小規模な穴で、出土土器も報告されていない。よって、時期は2と同じく中期中葉～後葉としておきたい。石材は黒曜石で、軸部長（報告書では幅）3.4cm、鉤部長（報告書では長さ）2.9cmと報告されている。

以上の隣接県における事例は、網羅的に探索したものではなく、折々に気づいた程度のものであるが、これまでに確認できたものは少ない。房総半島と同様に、事例としては存在するものの、件数は少ない、という状況を反映していると思われる。旧稿で示した、中期後葉を中心とした時期に鉤状を呈する石器が広範囲（甲信越、関東）で確認できる、という状況を追認する事例であろう。ただ、現状では事例そのものは少なく、縄文中期にこうした石器が「一般的」な石器であったとみなしうるような出土状況ではない、と言えよう。

3 房総半島における「鉤状石器」の特徴

千葉県内で出土した鉤状石器の属性については、第1表にまとめたところだが、あらためて、その特徴について記しておきたい。



第2図 周辺地域での事例 (S=2/3)

(形態について)

鉤状石器は、押圧剥離系列¹²⁾の石器であり、「軸部」に対してやや短い「鉤部」が付いた鉤状の形態を呈することが最大の特徴である。今回追加した3例は、いずれも石匙の特徴である「つまみ」状の作り出しを持たないものであった。旧稿で集成した軸部全体が残っている事例(旧稿1~4)にも、明瞭な「つまみ」状の作り出しは認められないことから、鉤状石器は『鉤状を呈する石器で「つまみ部」を作り出さないもの』と定義付けられそうである。このことにより、石匙との区別を明確化しておきたい。

(サイズ)

軸部長の平均は約5.9cm、鉤部長の平均は約3.8cmとなる(欠損した事例を除いた数値)。軸部長は、最短のもので4.9cm、最長のもので7.25cmである。旧稿でも述べたとおり、石材の少ない房総半島において、押圧剥離系列の石器としては目立って大きな、特異なサイズと言えよう。

(石材)

9例中、3例が珪質頁岩であり、1例を除き、すべて黒曜石以外の石材が用いられる。

(時期)

9例中、中期後葉と判断されたものが5例であり、中期中葉から後期初頭までの事例がある。今回の追加例から、中期後葉を中心とした時期に、特徴的にみられる石器である可能性が高まったと言えよう。

(千葉県内での分布状況)

出土地域を見ると、今回の追加した3例はいずれも、旧稿にはなかった、千葉県西部の東葛地域(柏市・松戸市)での出土例であった。旧稿では、印旛地域(佐倉市)1例、山武地域(山武市)1例、東京湾東岸地域(千葉市、市原市)3例、君津地域(木更津市)1例、であったので、千葉県内では、南部を除いて、ほぼ地域的な偏りがなく分布が認められると言えよう。

(出土遺跡の傾向)

今回追加した3例は、柏市小山台遺跡、松戸市紙敷遺跡という、中期中葉から後葉が主体のいわゆる環状集落で出土したものである。旧稿における事例では、千葉市有吉北貝塚が中期中葉から後葉の大規模な貝層を伴う環状集落である。佐倉市神門房下遺跡、木更津市伊豆山台遺跡は、環状となるかどうかは不明だが、中期中葉から後葉の多数の遺構が重複して検出された遺跡である。一方、山武市辻遺跡は中期末から後期初頭の集落で、土坑がやや多く検出されたが、遺構の重

複は少ない遺跡であった。また、市原市奉免上原台遺跡は、中期末の竪穴状遺構が単独で検出されたのみで、中期の目立った遺構はなく、中期においては「小規模」な集落だったと想像される¹³⁾。鉤状石器が環状集落のような特定の遺跡との関係が強い、といった傾向があるとまでは言い切れないであろう。遺構が多数検出される遺跡では、出土遺物も多量であることが普通で、「珍品」が出土する確率も高いと推測される。安易な結びつけは戒められるべきであろう。

(石器の性格)

千葉県内で鉤状石器の出土例は9例であり、いまだ少数と言えよう。膨大な遺物が出土した柏市小山台遺跡においても出土数は1点のみにとどまっており、今後も極端に例数が増えるといった事態は考えづらい。隣接地域での様相からも、原則的には希少性のある石器といえると思う。ただし、<数が少ないこと>が、即、<特別な意味を持つ>ということにはならないことに注意したい。

特殊な出土状況といった、石器の性格をうかがわせるような出土事例は、追加事例においても認められず、いまだ存在しない。房総半島においては、特異な形態のサイズの大きな石器であり、縄紋中期においても珍品であった可能性は高いが、旧稿で見通した通り、現状では、「実利以外の何らかの意味づけがなされていた可能性は否定できない」といった程度の解釈にとどめておくことが妥当と考える。

(周辺地域との関係)

今回、千葉県内での追加事例は、すべて「完形」もしくはそれに近いものであったが、軸部が直線的で、軸部と鉤部の長さのバランスがとれた整った形態のものが多い。旧稿での「完形」事例も、同様である。これに対し、神奈川県的事例(第2図1)は、軸部と鉤部が曲線的につながり、若干趣を異にしている。また、東京都西部~山梨県では、長い軸部に短い鉤部が付く形態のものが多く見られる¹⁴⁾。事例が少数のため限界はあるが、今後、地域差の存在を視野に含めた、より詳細な形態的な検討を進める必要があるであろう。

おわりに

2004年に集成した千葉県内の鉤状石器について、旧稿以降に確認した事例を追加するとともに、隣接県での事例を紹介した。そのうえで、あらためて、鉤状石器の特徴についてまとめた。今回の作業により、鉤状石器を、縄紋石器の一つの型式として認識しうる可能

性が高まったと言えるのではなからうか。

旧稿でも述べたとおり、鉤状石器という名称にこだわりはなく、より適切な名称等があれば従いたい。肝心なことは、こうした分類を行うことにより、これらの石器を、縄紋時代中期後葉を中心とした時期の文化事象として適切に位置づけることであろう。

縄紋社会を復元的に語る際、考古学的には当時の道具を適切に型式として認識し、道具箱の中に位置づけるような作業が必要になろう。房総半島の縄紋中期を語る際には「鉤状石器」も忘れずにしたい。

謝辞

本文を草するにあたって、以下の方々より御教示、資料提供等をいただきました。記して感謝いたします。なお、敬称は略します。

大村裕・上守秀明・合田恵美子・島立桂・大工原豊・建石徹・千葉毅

註

- 1) 大内千年 2004 「-研究ノート-房総半島出土の縄紋時代「鉤状石器」について」『東邦大学付属東邦高等学校考古学研究会会誌 東邦考古 第28号』 東邦考古学研究会 p21-p29
- 2) 橋本勝雄ほか 2019 『柏北部地区埋蔵文化財発掘調査報告書15- 柏市小山台遺跡B区-縄文時代以降編』(公財)千葉県教育振興財団
- 3) 旧稿に倣い、軸に相当する部分の長さを「軸部長」、鉤部に相当する部分の長さを「鉤部長」と呼称する。
- 4) 関口純也ほか 2003 『千葉県松戸市 紙敷遺跡』松戸市教育委員会
- 5) 萩野早苗ほか 2010 『千葉県松戸市 紙敷遺跡 第1地点』加藤建設株式会社
- 6) 旧稿では、木更津市伊豆山台遺跡SD002出土石器を関連資料として取り上げたが、つまみ部を明瞭に作出する石匙であること、サイズが明らかに小さいことから、今回、鉤状石器の事例から除外した。
- 7) 海老ヶ作貝塚第2次発掘調査団 1975 『海老ヶ作貝塚-第2次発掘調査概報-』船橋市教育委員会社会教育課
- 8) 船橋市教育委員会飛ノ台史跡公園博物館 2022 『令和4年度船橋市飛ノ台史跡公園博物館企画展 学制150年記念展 ガッコウの下の遺跡』
展示で実見した限りだが、軸部長5cmほどの黒曜石製のもので、鉤状石器の可能性が高い。
- 9) 矢島國雄ほか 2015 『道場窪遺跡 遺物編』綾瀬市教育委員会・(有)アルケーリサーチ
- 10) 鈴木美治ほか 1985 『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡(上)(下)』(財)茨城県教育財団
- 11) 註10の文献の「終章 むすび」(p244)に記載がある。
- 12) 大工原豊 2020 「縄文石器の系列分類」『縄文石器提要』ニューサイエンス社 p20-p24
- 13) 「集落の規模」を適切に表現することは困難である。ここでいう<小規模な集落>は、地域の拠点となるような大規模な集落ではない、といった程度の意味である。
- 14) 宮里学 1998 「縄文時代の「カギ状石器」の県内出土事例」『森和敏氏退職記念山梨考古学資料集I』森和敏氏退職記念刊行委員会 p35-p38